カイ KAI

ill. たわん

異世界のんびり漫遊記

子ドラゴンと冒険者ライフを楽しみます

A Leisurely Journey Through Another World

Characters

A Leisurely Journey Through Another World

シエル
本作の主人公。穴に落ち、気づくと14歳の姿で異世界へ転移していた。リッキーたちに保護され、冒険者になる。

ユーリ
シエルが持っていた卵から生まれたドラゴンの子ども。無邪気で好奇心旺盛。

エミリー
シエルを保護した冒険者パーティーの攻撃魔法担当。セクシーで姉御肌。

スコット
シエルを保護した冒険者パーティーのリーダー。おおらかで面倒見がいい。

山田
シエルが元いた世界の同僚で、親友。

リッキー
シエルを保護した冒険者パーティーの斥候担当。ノリが軽く、人当たりがいい。

リリー
シエルを保護した冒険者パーティーの回復担当。ドラゴンに目がない。

第一話　全ての始まり

俺、沖紫惠琉（おきしえる）は会社帰りに行きつけの居酒屋で飲んでいた。
「はぁ……今日もすごい忙しくて疲れたなぁ～……」
同僚の山田（やまだ）は疲れ果てた顔でため息をつきながら、注文したビールを一気飲みした。
山田は営業部のエースで上からの期待が半端ないらしく、いつも月の終わり頃になると愚痴（ぐち）を言っている。
ノルマがギリギリの時は特に大変らしい。
そんな時は俺を飲みに誘って愚痴りながらストレス発散をするのだ。
ちなみに、俺は経理部だから、ほどほどの忙しさでしかないのでいつ誘われても問題はない。
「……それにしてもお前、全っ然浮いた話ないよな」
唐突（とうとつ）に山田がそんなことを言ってきた。
「……別にいいだろ、俺の勝手だ」
「まぁ、ぶっちゃけそうなんだけど、俺さ、よく取引先の人や会社の女性陣に聞かれんだよ。『沖

さんって付き合っている人いないんですか？』って」
「なんだそりゃ。そんなこと一度も聞かれたことないぞ？」
「そりゃそーだよ、本人には聞きづらいと思うぞ？　でもな、考えてもみろよ、整った顔で人当たりも良く、それでいて仕事もできる。そんな男がその歳で普通一人だと思うか!?　今だって周りの客がお前のことをチラチラ見ているんだぞ？　気づいてないのか？」
呆れたような顔で山田はそんなことを言った。
「全然モテない俺にそんなこと言ったって、現実味ないぞ？　うっ……なんか、ちょっと胸が痛くなってきた……」
俺は胸を押さえて渋い顔をする。
そう、この話の流れで分かるように、俺は年齢イコール彼女いない歴なのだ。
そんな心の奥底に閉じ込めておいた禁断の箱を、山田は開けてしまった。
そんな悲しいことは忘れてせっかく楽しく飲んでいたのに……と山田を軽く睨(にら)む。
すると、山田は微妙な顔をして言った。
「……ホント、なんでみんなお前に声をかけないのかねぇ～」
それからはあまりその話には触れずに、またもや山田の愚痴を聞きながら相槌(あいづち)を打つことに専念して過ごし、美味しい酒と料理を楽しんで今日はお開きになった。

「じゃあ明日、明後日(あさって)と連休だからゆっくり休めよ！」
そんなことをお互いに言い合って、俺は一人で自宅への道を歩き出した。
しばらく歩いていると、ふと通りがかった店に目がいった。
こんな所にこんな店、あったっけ……？
その店はとても古めかしい建物で看板もなく、中は薄暗い照明がついているだけで、一体何を売っているのかも外からではよく分からなかった。
そんなにあやしい雰囲気なのに、なぜだか無性(むしょう)に中に入ってみたくなり、一歩店の中に足を踏み入れた。
すると、中は全くあやしい雰囲気などなく、何に使うのかよく分からないガラクタ（のように見える物）が所狭しと置いてあった。
俺はそれらを見ながら奥の方へと進んでいく。
すると、カウンターの所にフードを被ったお婆さんがいた。
「すみません、ここって一体なんの店なんですか？」
俺はそのお婆さんに、思わずそう声をかけてしまった。
お婆さんはそんな俺を見てにやりと笑い、口を開いた。
「ヒッヒッヒッ、何って、ここは魔道具の店さね」
「……魔道具？」

「そう、色々便利な機能のついた道具を売っているんだ。お前さんも一つ買ってみるかい？」
「便利な道具……ねぇ～……？」
「そう！　例えばこの首輪！　この首輪は取りつけた生き物の体がどんな大きさであっても自動でサイズが変わったり、これをつけた生き物がどこにいるのかもすぐに教えてくれたりする機能や、その生き物に悪さをしようとするものから守ってくれる機能もついている。他にもこの腕輪なんか、あらゆる攻撃から身を守ってくれる機能があるんだよ？」
お婆さんはまた少し笑みを浮かべながらおすすめの品らしき物を棚から取り出してカウンターに置いた。
首輪の方は、少しキラキラした石がついてはいるが、どう見ても犬用の首輪にしか見えない。
腕輪の方は、シルバーになんらかの宝石がついていて、よく分からない文字が彫られている海外の民芸品みたいな感じだ。
「……二つともなかなか綺麗だけど、首輪はペットを飼っていないからいらないし、腕輪も普段使いできないからいらないかな」
俺はきっぱりとお婆さんにそう言ってやったのだが、お婆さんはにやりと笑った。
「まぁまぁ、持っておいてもいいんじゃないかねぇ～……あっ、そうだ！　お前さんにはこれを渡そう」
そう言ってお婆さんは、カウンターの下からまたもや何かを取り出してきた。

それは、とても大きな卵だった。
まるでダチョウの卵のような大きさで、なぜだか光の当たる角度によっては銀色にも見える不思議な卵だった。
「この卵は生きているから、肌身離さず持っていなさい。ちょっとしたおまけに、この卵を入れられる肩掛け鞄をつけてあげるさね。これは持ち主を登録して盗難防止の魔法をかけてやるからのぉ。……とまあ、そんなことだから、さっきの首輪と腕輪は購入していきなさいな。おまけしてやるさね」
俺は酔っ払っていたこともあり、ついその卵と肩掛け鞄、首輪、腕輪を購入してしまった。
ちなみに、肩掛け鞄に魔法をかけるとかなんとか言っていたが、ちょっと指先に針を刺して血を出し、その血を鞄に吸い込ませるだけだった。
買った物をみんな肩掛け鞄に入れて持たされたが、この肩掛け鞄、不思議なことにあんなに大きな卵を入れたにもかかわらず薄っぺらいのだ。
ついでだからと今自分が持っている色んな物を入れていた通勤用の鞄なんかも入れてみたら、吸い込まれるように入っていった。
ん～、酔っているからそう見えただけかな？

その後、俺はお婆さんに見送られながら店を出た。

ふと振り返ると、そこには店などなく、ただのコンクリートの壁があるだけだった。
「うわっっっ!!」
俺は面食らってものすごく間近にある壁から離れた。
すると、あまりにも焦ったからか足がもつれ、そのまま尻餅をついてしまった。
その時にふと、あのお婆さんから購入した肩掛け鞄が目に入った。
夢……じゃなかったのか……？
色んなことがあったせいですっかり酔いが醒めてしまったが、それでもパニックにならなかったのはあまりにも非現実的すぎたからだろう。
……とりあえず家に帰るか。
尻餅をついたままコンクリートの壁を眺めてぼーっとしていたが、このままでは酔った挙げ句に地べたで寝てしまう人だと思われかねないと、立ち上がってまた家に向かって歩き出した。
その間中、先ほどのお店やお婆さんとの会話なんかを思い出しては首を傾げてばかりいたけど、結局はよく分からないという結論に落ち着く。
そしてふと、もらった肩掛け鞄を眺め、立ち止まった。
とりあえず、帰ったらこの鞄の中にある物を取り出してみるか。
そんなことを思いながら前を向いて左足を踏み出したのだが、その足はいつの間にか足元にぽっかり空いた穴に吸い込まれてしまった。

「うわっっっ!!」
足を踏み込んだせいでバランスを崩し、そのまま体が穴の中に落ちてしまう。
延々と落ちていく穴の中で俺は、後に訪れるであろう穴底に叩きつけられる痛みを想像し、恐怖で気を失ってしまった。

第二話　異世界、こんにちは！

気を失っていた俺は、瞼越しのあまりの眩しさにふと目を覚ました。
眩しすぎて未だに目が開けられないが、草や土のすごい匂いが鼻腔に届いている。
それになんだか体もあちこち痛い。
……もしかして昨日飲みすぎて、家まで辿り着かずに地面で寝てしまったんだろうか？
過去にあまりにも深酒をすると記憶をなくすことがあったので、もしかして？　と思って慌てて飛び起きる。
「……えっ？」
目を開けて周りを見渡すと、そこは森の中だった。
「ここはどこだ？　会社からの帰り道に、こんな森なんてなかったはずだけど……」
俺はそんなことを呟き、ふと自分の服装を見る。
昨日着ていたスーツや革靴はそのままだったが、いつもの通勤鞄ではなく、見知らぬ鞄をたすきがけしていた。

「……あれ？　この鞄はなんか見覚えあるけど、何があったんだったっけ……」
俺はそう呟き、鞄の中を見てみた。
鞄の中はなぜか真っ暗で、中が見えない。
恐る恐る手を入れてみると、その瞬間、目の前の空中に透明なボードが現れた。
「なんだ、これ？」
ボードには日本語で内容物の種類や名前などが書いてあった。
「……卵？　卵ってなんだ？」
そう呟くと、なんの感触もなかった手に、卵の表面みたいな物が触れた。
そのまま持って取り出してみると、そこにはダチョウの卵のような大きさの卵があった。
「……あっ！　なんか思い出してきたぞ！　昨日山田と飲んだ後に一人で歩いていたら、不思議な店を見かけたんだったっけ……」
その店でもらった卵や鞄だったのを思い出し、その後に深い穴に落ちたのも思い出した。
「穴に落ちたのに、なんで地面で寝ていたんだ？」
俺は卵を持ちながら首を傾げてそう呟き、立ち上がって周りを観察してみる。
全く見覚えのない森だった。
辺りを見回しながら、ふとこの前読んだ異世界転移の小説を思い出した。
あの小説にも、穴に落ちたら異世界に転移していた……なんて書かれていたなと思い出したとこ

ろで、もしかして俺も異世界に来ちゃった？　と、ふとあり得ないことを想像してみた。
「まさかなぁ……？」
そんなことを思っていると、少し離れた所にある茂みがガサガサと動いた。
はっとしてそちらを見た瞬間に、その茂みから黒く大きな狼が出てきてこちらに走ってきた。
俺は驚いてその場から動けずにいたが、その狼は俺から三十センチほどの距離に来ると、急に見えない壁にでもぶつかったかのように「ギャンッ！」と鳴き、一旦後ろに飛び退いた。
そして、また警戒をしつつ近づいてきて、今度は見えない壁を思い切り引っかき始める。
「えっ、なんだ、これっ⁉」
俺が狼が怖くて卵を抱えながら縮こまっていると、そのうち狼は諦めてどこかへ去っていった。
「なんか狼はどこかに行ってくれたけど……やっぱりここ、日本じゃないよな」
そう呟いたら、急にものすごい不安に襲われた。
全くの見知らぬ場所にたった一人でいるのだ。
しかも周りには、もしかすると先ほどの狼みたいに襲ってくるやつがいるかもしれないのだ。
「このままここにいてもさっきみたいに襲われるだけだろうから、少し移動してみるか」
俺は勇気を出して立ち上がり、足を踏み出そうと思ったところで先ほどの出来事を思い出す。
「……そういえばさっきの狼、なんか見えない壁にぶつかったよな？」
俺は卵を鞄に戻し、壁がありそうな場所に両手を伸ばす。

だがそこには何もなく、触ることはできない。
「……あ、そういえば昨日のお婆さん、なんかよく分からない腕輪をくれたっけ」
俺は鞄から腕輪を取り出し、よく見てみた。
とても綺麗な宝石がついている銀色の腕輪だ。
宝石を挟んで一周するように、見たこともない文字や記号がびっしりと彫り込まれている。
昨日は全く気づかなかったが、この腕輪、うっすらと光っている。
「確かあのお婆さん、あらゆる攻撃から守ってくれる……なんて言ってたっけ？　あれってホントなのかな？」
とりあえず藁にも縋る思いでその腕輪を手首につけてみると、一度だけ強く光り、その後はもう光らなくなった。
なんだかよく分からないが、この先俺を守ってもらえるならありがたいと思い、とりあえず移動を開始した。

しばらく周りをキョロキョロしながら歩いていると、遠くの方で獣の叫び声や人の大きな声が微かに聞こえてきた。
……！　人の声だ！
俺が慌ててその声のする方に走っていくと、そこでは男女四人と先ほどの狼二匹が戦っていた。

辺りには狼の死骸が六匹転がっている。
そうこうしている間に一匹、大きな剣を使っている男に倒された。
残りの一匹は他の狼より二回りも大きいのではないかと思うほど、とても大きな個体だった。
その狼は男たちから目線を外すと、その様子を見ていた俺に目を向けた。
俺がぎょっとしたのも束の間、狼は俺の前へと移動してきた。
「……！　危ない！」
男たちは狼が急に動いたことによって俺の存在に気づいたらしい。
狼を追ってこちらに来てはいるが、間に合わない。
狼は俺の目の前に来ると前脚を振り上げ、男たちが来るよりも早く俺に向かって振り下ろした。
俺は突然の出来事に立ちすくんでしまったままで、驚きに目を見開いた。
するとやはり、狼の爪は俺の三十センチ手前で見えない壁に阻まれた。
狼の方はまさか阻まれるとは思っていなかったようで、驚いて動きを止めてしまった。
その隙をついて、追いついてきた冒険者たちがその巨大な狼を倒した。
「おい、大丈夫だったか？」
大柄な男が大剣を肩に担ぎながら俺に声をかけてきた。
「はい、ありがとうございました！　おかげで助かりました！」
俺がお礼を言うと、男はニカッと笑って俺の頭をグシャグシャと撫でてくる。

「ホント、グレートウルフの亜種が君の方に走っていった時は肝を冷やしたわよ。無事で良かったわ！」
そう言いながら妖艶（ようえん）な雰囲気の女性が俺のそばまで歩いてきた。
他の二人もゆっくりと歩いてくる。
四人が俺の周りに集まったところで、自己紹介が始まった。
「俺たちは『スノーホワイト』っていうBランクの冒険者のチームだ。俺はリーダーのスコット。よろしくな！」
まずは、一番大柄な大剣使いの男が挨拶をしてきた。
彼はとても大きく、俺の頭が彼の肩に届かないほどだ。
短髪で金髪、碧眼（へきがん）のワイルドな感じの男だ。
「私は攻撃魔法担当のエミリーよ。よろしくね」
次に挨拶してきたのは、先ほどスコットさんの次に声をかけてきた妖艶な雰囲気の女性だった。
長い黒髪を後ろで三つ編みにして前に垂らしているちょっとキツめの顔の美人だが、雰囲気とは違い笑顔はとても優しそうだ。
「俺は斥候（せっこう）担当のリッキーだ。ホント、お前運がいいな！　グレートウルフが攻撃を外すなんてな！　そうじゃなかったら俺たちが追いつく前にやられていたんだぜ？」
そう言ってウインクしてきたのは、エミリーさんより背が高くて細マッチョな体型の男だった。

見た目はなんだか軽そうな感じで、薄い茶色の長髪を両脇だけ後ろで結んでいる。目の色は髪色より濃い茶色だ。
彼はどうもこのチームのムードメーカー的存在なのか、とてもフレンドリーな人のようだ。
「えっと、私は、回復魔法担当で、リリーっていいますっ！　よろしくですっ！　あっ、もし怪我をしているなら言ってくださいね、すぐに治しますからっ！」
慌てたように声をかけてきたのは、とてもおっとりとした雰囲気の、ふわふわのウェーブがかった薄い金髪を肩で切り揃えた可愛い感じの女性だった。
話し方から察するに、もしかすると軽く人見知りをするタイプなのかな？
「俺の名前は『沖紫惠琉』っていいます。シエルって呼んでください」
最後に俺が自己紹介をした。
それにしても彼らは、それぞれ差はあるが、四人揃って俺よりも背が高い。
一番低いリリーさんでさえも、俺の目線より少し上に顔がある。
この世界の人たちは、みんな背が高いのだろうか……
「それにしても君はまだまだ子どもなのに、よくこんな危険な森に一人で来たね？」
スコットさんがそう言ってきたので、軽くショックを受けた。
やはり身長が低いから子どもだと思われたんだろうか。
「それになんだか見たことのない服装をしているわね。しかもサイズが合ってないみたいだし」

エミリーさんにそう言われて、俺は改めて自分の体を見下ろした。
確かに言われてみれば、なんだか少しぶかぶかだ。
日本にいた時にはくるぶしくらいの丈だったパンツの裾が地面を擦っているようだし、上着の肩幅や身幅なんかも全然合ってない。
靴も多少大きいものの履けていたので、この状況に焦っていたこともあり気づかなかった。
一体どうしたんだろうか……？
まさか、体が縮んだ……？
俺が軽くパニックになっている間に、スコットさんとリッキーさんは倒したグレートウルフを全て回収してきたようだ。
二人の持っている鞄も、俺の肩掛け鞄のように、一部を中に入れるとスルスルと吸い込まれる性質を持っているようだ。
それに、あんなに大きな物を入れたにもかかわらず、見た目の大きさに全く変化がないようだ。
「……言っても信じてはもらえないでしょうが、俺、どうも違う世界からここへ来たようで……。前にいた世界で落とし穴みたいなものに落ちたと思ったら、気がついたらこの森にいたんです」
俺が正直にそう告げると、四人は驚きに目を見開いた。
「……確かに、過去にもそんな人物がいたと文献に載っていましたね。とても珍しくて、一番最近では確か百年前くらいだったはず」

何かで読んだのか、そんなことをリリーさんが言ってきた。
良かった、過去にも一応前例があって。
それなら疑われずに済みそうだ。
「だからそんな変な格好をしているのね。あっ、そういえば、確か『落ち人』は色々なスキルなんかを持っているって聞いたことがあるわね！」
「そうなんですか？　それはどうやって確認できるんですか？」
「ステータスボードを出すと確認できるわよ！『ステータスオープン』って言えば目の前にステータスが出るわ。ただし、それを見ることができるのは本人のみよ」
「なるほど！　じゃあ早速見てみます！　ステータスオープン」
エミリーさんがやり方を教えてくれたので、早速やってみた。
ステータスにはこんなことが載っていた。

『ステータス』
【名　　前】シエル
【種　　族】ハイヒューマン（異世界人）
【年　　齢】十四歳
【職　　業】なし

【レベル】1
【体　　力】５２０
【魔　　力】８００
【攻撃力】３００
【防御力】３５０
【素早さ】２２０
【　運　】７７７
【スキル】鑑定……レベル1
火魔法……レベル1
水魔法……レベル1
土魔法……レベル1
風魔法……レベル1
光魔法……レベル1
闇魔法……レベル1
神聖魔法……レベル1
時空間魔法……レベル1
【固有スキル】インターネット

異次元ポケット
神獣・魔物使役術
経験値倍化
【称　　号】異世界から来た異邦人
神に選ばれし者

なんか、どこから突っ込んだらいいんだろう。
まず年齢が若返っていて、日本では二十八歳だったはずなのに、ここではなぜか半分の十四歳になっていた。
どうりでみんな、俺より身長が高いはずだよ。
十四歳当時の俺は周りよりも少し高いくらいで、確か百六十五センチだった。
高校生になってからぐっと伸びて、最終的には百八十センチにもなったんだ。
……またそのくらいまで伸びるかな？
でも、そう考えると、リリーさんでさえも百七十センチほどあるということだ。
やはり、こちらの世界の人間は、みんな背が高いのは間違いないだろう。
他にも気になるものがあるが、どうしたものかと頭を悩ませる。
『インターネット』なんてみんなに聞くわけにいかないもんな。

他にも『神獣・魔物使役術』や『異次元ポケット』なんてものもある。
これはみんなに知っているか聞いても大丈夫なんだろうか？
「今、自分のステータスを見ているんですが、皆さんは『神獣・魔物使役術』や『異次元ポケット』って聞いたことあります？」
すると、四人は顔を見合わせて話し始めた。
「聞いたことあるか？」
「いや、俺は聞いたことないな。あ、でも似たようなので魔物を使役している魔物使いっていう職種はあるな」
「確かにいるわね、たまに街中で魔物を連れて歩いてる人。でもそれならそんなに珍しいスキルじゃないのかしら？」
「えっとですね、一つずつ説明していきますね。まずは『神獣・魔物使役術』ですが、これはその名の通り、神獣や魔物をテイムして使役する術です。異世界人ではないですが、ごく稀にそういう才能を持った人が生まれていて、リッキーの言う通り、現在では魔物使いとして冒険者活動をしているそうですよ。でも魔物は使役できても、神獣はその存在を見つけることができないので、使役してる人は見たことないですが」
リリーさんはそこまで話すと、俺の方を向いた。
「あと『異次元ポケット』の方ですが、それはどうやら異世界人特有のスキルらしく、世界を渡った時に付与されるもののようです。それぞれのスキルの使い方などは文献にも載っていたはずですので、街に戻ったら図書館に行きましょう」
ちなみに、「スキル」はどんどん増やして獲得していくことができるもので、「固有スキル」はその人独自の生まれつき持っているスキルを指すらしい。
スノーホワイトの四人は、俺という一時的な仲間が加わったので、とりあえず森の探索は中止して街に帰ることにしたようだ。

街への道すがら、貨幣や人種、世界の国や情勢なんかについても教えてもらった。
今向かっている街は、クレイン国の南側にあるそうだ。
森から一番近い街だそうで、冒険者もたくさんいるらしい。
このクレイン国は差別のない平和な国で、たくさんの様々な人種がいるが、一番多い人種はやはり人族なんだって。
貨幣の価値は、どうやら銅貨が日本での十円、大銅貨が百円、銀貨が千円、金貨が一万円、ミスリル金貨が百万円らしい。
さすがにこちらのお金は所持していないので、どうにかしてお金を手に入れないと、街に着いても何もできないことに気づいた。
「そういえば俺、こちらの世界のお金を全く持っていないんですが、どうやったら稼げますか？」

回りくどく言ってもしょうがないので、直球で聞いてみた。
「そうねぇ……やっぱり一番稼げるのは冒険者になって魔物を狩って、その素材を売るって感じかな？　この森の中心部は結構高レベルの魔物がいるから、もう少し街に近づいたら一緒に狩りをしましょうか」
「そういえば、シエルくんって戦えるの？　武器は持ってないけど……何が扱えるのかしら？」
エミリーさんの問いかけで、俺もそういえばそうだと気づいた。
「ステータス的には火、水、土、風、光、闇、神聖、時空間魔法が使えるらしく、他に物理攻撃のスキルは一つも持っていません。それと、今までいた所では魔法というものがなかったので使い方が分からないんですよね」
俺がそう言うと、みんなが驚いた顔をした。
「えっ、全属性の魔法が使えるの⁉　しかも神聖魔法と時空間魔法まで⁉　そんな人、今まで見たことがないんだけど！　魔法に特化しているエルフでも、全属性は使えないのに……さすがは異世界人ってところなのかしら⁉」
エミリーさんの言葉に、みんなも次々に同意する。
「そうだな、俺も初めて聞いた」
「俺もだぜ！　確か三百年ぐらい生きているギルマスでさえも、攻撃系魔法と時空間魔法しか扱えないって話だぜ？　だから神聖魔法を扱えるのは、神に選ばれたやつだけなんだって聞いたな」

「そうですね、確か今は、神聖魔法は神に仕える者しか扱えないことになっているはずです。それにスキルを持っていても、神と契約を結ばなければ使えないと言ってましたしね、神聖法国の人たちは。ちなみに、私の使う回復魔法は、神聖魔法ではなく水魔法です」
「そうなんですか？　なんか複雑ですね。神様なんて信じていないし、会ったこともないのに称号にも『神に選ばれし者』ってありますしね」
「そうなのか？　……まぁ、それはともかくとして、神聖法国のやつらにシエルの存在を知られるわけには……いや、存在自体は知られてもいいが、神聖魔法のスキルを持っていることは絶対に知られないようにしないといけないな。そうじゃないと、神聖法国のやつらがお前を拉致しようとするのは間違いない」
とても険しい顔をしてそう言ったスコットさんに、エミリーさんも頷く。
「そうよね、あの神聖法国の連中なら強制的に捕まえて洗脳しそうだものね」
えっ、神聖法国っていう国はそんなやばい連中ばかりなのか⁉
「洗脳って、神聖法国って国は一体どんな国なんですか？」
すると、リリーさんが苦い顔をしながら教えてくれた。
話によると、どうやら回復魔法を使えるリリーさんも一度だけ強制連行されたらしい。
その時は、リリーさんだけではなく、スノーホワイトのメンバー全員で行ったそうだ。
彼女の身に何かあったらすぐに助けるためだったそうだが、結局は鑑定を受けただけで無事に解

放されたらしい。
その理由は「神聖魔法の使い手じゃなかったから」だそうな。
とりあえず鑑定以外は何もされなかったから良かったものの、もし神聖魔法の使い手だったら、そのまま監禁されてしまうところだったと言っていた。
俺はなんてひどい国なんだと憤ったが、ついでに神聖魔法についても聞いてみた。
どうやら神聖魔法は神の力を借りて魔法を行使するものらしく、それゆえに神と契約する必要があるらしい。
だから、普通の魔法より威力が高く、水魔法の回復では治せないほどの怪我や病気、毒、光魔法では治せないほどの呪いなんかも治せるし、法皇なんかだと、寿命を迎える前に亡くなった死者も生き返らせることができるとの噂だそうな。
まあ、それはあくまで噂であって、実際に生き返らせてもらったって話は聞いたことがないらしい。
ともかくそんなすごい力を持っている国なのに、他の国から距離を置かれているのには理由がある。
それは、他国にもその国の宗教の教会があるにもかかわらず、神聖法国がたびたび「うちの国の教会を置かせろ」と無理矢理迫ったり、国境では隣り合っている国と小競り合い程度の争いを起こして、相手側の領土を少しずつ奪ったりしているからだそうだ。

その上、中位以下の神官や聖女はまるで人形のように感情が欠落しているそうで、上からの命令で淡々と仕事はこなすが、口は一切開かないので、そこから「洗脳している」との噂が立ったらしい。
実際、リッキーさんの友人が神聖法国に連れていかれて神官になったそうだが、明らかに人が変わって、会ってもあまり話さず、口を開けば「神聖法国は素晴らしい国だ」ということばかり言っていたそうで、会話が噛み合わなかったらしい。
「……そんな国なんですね。特に近隣の国に争いをふっかけては領土を拡大しようとするなんて、そんな国には俺、行きたくないですよ」
「そりゃそうだよな、普通の神経だったらそんな危ない所に行きたいとは思わないさ。だから俺たちはシエルが神聖魔法を使えるってことは絶対に漏らさないし、お前も迂闊に話すんじゃないぞ？それと、あの国には近づかないようにな。『鑑定』のスキルを持っているやつがいるらしく、調べられればすぐバレて二度と外には出してもらえないだろうからな」
「えっ！　それってまずくないですか!?『鑑定』で色々見られてしまうなら、異世界人であることもバレてしまうってことですよね？」
「あぁ、だからこそ外に出られないだろうってことさ。異世界人なんて、それこそおとぎ話的な存在だから、洗脳まではされなくても、色々聞くために国の奥深くに閉じ込められて二度と出られないのは間違いないな」

「そんな国には捕まりたくな～いっ!!」
俺がそう叫ぶと、四人は軽く笑いながら頷いた。
「とりあえずまだ街まで距離があるし、戻りながら戦い方なんかを教えてやるよ！　シエルの場合、攻撃方法は何がいいかな？」
「聞いたスキルだと魔法特化みたいだけど、近接戦闘もこなせるようになっておかないと危険よね？」
「魔法はエミリーとリリーが使い方なんかを教えるとして、近接戦闘は俺とリッキーが教えるか」
「そうだな！　じゃあ近接戦闘の武器は何にする？　とりあえずはショートソードにするか？」
リッキーさんがそう言いながら、魔物を入れていた鞄から、スコットさんが持っている剣よりだいぶ細身のそれを二本と、服を一式取り出した。
「さすがにその服装だと目立つし動きづらそうだから、俺の予備の服をやるよ。まぁ大きかったら捲って着てくれよな！」
リッキーさんがウインクをして服を俺に渡し、着替えてくるように言った。
着替えて戻ってきたら剣を一本俺に渡し、もう一本を自分が持って構える。
どうやら早速教えてくれるらしい。
こういう剣は使い方が分からないので、握り方や振り方など初歩から教えてもらい、ある程度慣れてきたらリッキーさんと模擬戦をすることになった。

何回か模擬戦をしていると辺りが暗くなり始めたので、ちょうど開けた場所だったこともあり、今日はそこで野営することになった。
「シエルって剣を握ったこともなかったんだろ？　最初はなんかおぼつかなかったもんな。でもこんな少しの時間で魔物と戦えるほどまで扱えるようになるなんて、ものすごく呑み込み早いな！」
リッキーさんにそう褒められ、頭をくしゃくしゃと撫でられた。
中身は子どもじゃないから、なんかすごく照れてしまう。
それにこういう剣は触ったことないけど、元の世界では一応剣道の経験はあるのだ。
その後野営の準備をし、夕飯は何かを押し固めた食べ物とお水を分けてもらい、簡単に済ませた。
「シエルはまだ戦ったことないから、今夜の見張りはしなくていいぞ。それに疲れているだろうしな。しっかり寝て、体を休めてくれ。見張りの順番は俺、エミリー、リッキー、リリーの順だから、みんなもそれぞれ休んでくれ」
そうスコットさんから言われてその場は解散となり、俺は男性陣のテントへとリッキーさんに連れていかれた。
リッキーさんと一緒に横になって鞄を枕代わりにすると、よほど疲れていたのかすぐに睡魔が来て意識が飛んでしまった。

◇
◆
◇

翌朝にスコットさんに起こされると、今朝も昨夜同様に食事を軽く済ませ、テントなどを片づけてから移動を始めた。
移動しながらエミリーさんに魔法の発動の仕方を聞いて練習をし、なんとか初期魔法はひと通り使えるようになった。
「シエルくんって、やっぱり呑み込み早すぎない？　そんなふうに一つ発動できるようになったらすぐに他もできるようになるって、普通じゃあり得ないわよ？　そこも異世界人だからなのかしら……」
「そうなんですかね？　別にステータスにはそんなことなんにも書いてなかったんですが」
「まぁなんにせよ、次に魔物と遭遇したら戦ってみる？　だいぶ街に近づいてきたから、魔物も弱いのしか出てこなくなったしね」
「なんかあったら私たちがサポートしますので大丈夫ですよ！」
エミリーさんとリリーさんにそう言われて、次に魔物に遭遇したら俺も戦うことになった。
しばらく森の中を進んでいると、急にリッキーさんが右前方を見て警戒し出した。
「右前方から魔物が接近！　多分……三匹かな？」

リッキーさんがそう告げると、みんなは武器を構えて戦闘準備をする。
それからあまり間を置かずにオークが三匹ほど来た。
「オーク三匹か。じゃあ二匹は俺たちが引き受けるから、シエルは残り一匹を引き受けてくれ。リッキーはシエルのサポートをよろしくな！」
「了〜解っ！」
そう言うとリッキーさんは俺を連れて、少し離れた場所にいるオークの方へ向かっていった。
「俺は万が一の時に助けに入るが、それまではシエルが魔法でも剣でもいいから戦ってみてくれ」
「……っ！　分かりました！　……ウインドカッター！」
リッキーさんにそう言われたので、狙いを定めてウインドカッターを使ってみた。
だがやはり初戦闘なので、動く対象物に当てるのは難しく、胸を狙ったつもりが肩のつけ根に当たり、そのままオークの肩を切断して後ろに流れた。
「おぉ〜、初期魔法なのに結構威力あるんだな」
リッキーさんにそう言われたけど、普通はここまでの威力はないのかな？
とりあえず倒さなければと、もう一度ウインドカッターを使ってみる。
今度はあまり外さず、うまくオークを倒せた。
「よ〜し、うまく倒せたな！　じゃあ、このオークはシエルの鞄に入れておきな。街に行ったら冒険者ギルドで買い取ってもらったり、解体をしてもらったりするといいよ」

リッキーさんがウインクをしてそう言ってくれたので、俺は倒したオークを鞄に入れた。
あんなにデカいのに、普通のサイズの肩掛け鞄に腕を突っ込むだけで、スルスルと入っていくのは何度見ても驚きだ。
オークをしまってから周りを見ると、もうすでに他のメンバーはオークを倒して収納し終わっていたようで、こちらへ歩いてきた。
「そっちも無事に討伐し終わったようだな。リッキー、どうだった、シエルの戦闘は？」
「かなり魔法の威力が高いみたいだな。初期魔法のウインドカッターでもうまくオークの腕や体を切断できたし」
スコットさんに聞かれてリッキーさんはそう答えた。
すると、エミリーさんが笑顔で頷きながら「そうなのよね、シエルくんの魔法って普通よりも数倍威力が高いのよね」と言って、リッキーさんに賛同した。
それからも街へ向かいながら何度か戦闘をしたが、危なげなく倒せた。
そろそろ街に着きそうという頃には、みんなから戦闘に関してはお墨つきをもらえた。あとは冒険者ギルドに着いたら、冒険者登録と倒した魔物の買い取りを手伝ってもらうことになった。
「ホント、何から何までお世話になってしまってすみません。とても助かります！」
俺が謝ると、リッキーさんはニカッと笑った。
「いやいや、俺たちがやってやりたいだけだから気にするなよ」

エミリーさんも微笑んで言う。
「そうよ、後輩の面倒を見ている先輩冒険者なら、これくらい当たり前よ？　ホントは依頼の受け方なんかも教えたいところだけど、街に着くのは夕方前になりそうだしね」
「だからそれに関しては明日かな」
「何はともあれ、まずは無事に街に着かなくちゃね！」

第三話　ローランの街

それからあまり時間をかけずに街に到着。
エミリーさんの予想通りに夕方前には着いた。
入り口の門番さんがスコットさんたちに気づくと、近づいてきて親しげに話し出した。
「よう、スコットたちじゃないか！　しばらく前に街を出て森の方に行っていたようだが、何か依頼でもあったのか？」
「あぁ、実は森の方でグレートウルフの群れが頻繁に目撃されててな。あの森の浅い所は比較的低ランクの冒険者が行くんだが、さすがにグレートウルフの群れは低ランクには厳しいとギルドからお達しがあって、俺たちが向かって討伐することになったんだよ」
「そうそう、グレートウルフの群れとの戦闘中に、この子が出てきたから保護したのよ」
スコットさんとエミリーさんはそう門番の人に答えると、俺の方を振り返り二人で頭を撫でてきた。
……俺、そこまで小さな子に見えるのかな？

そんな疑問が顔に出ていたのか、リッキーさんとリリーさんがフォローを入れてくれた。
「シエルはそこまで幼くないだろうから、スコットとエミリーはその態度を改めた方がいいんじゃないか？」
「そうですよ。シエルくんは受け答えもかなりしっかりしていますし、物覚えもすごくいいですから、そんな頭を撫でられるような年齢じゃない気がしますよ？」
すると、エミリーさんがすまなそうな態度で謝りつつ聞いてきた。
「ごめんなさいね、可愛い顔しているからついね。そういえばシエルくんって実際、何歳なの？」
みんな興味津々な顔でこちらを見てくるので、実際の年齢ではなく、ステータスにある年齢の「十四歳」と答えた。
すると、スコットさんとエミリーさんは驚き、リッキーさんとリリーさんは「やっぱりね！」って顔をしていた。
「やっぱり成人直前の年齢じゃん！　エミリーお姉ちゃんとスコットおじちゃんがごめんなぁ～、シエル！」
リッキーさんがスコットさんとエミリーさんをからかうように言った。
「なんだとぉ～!?　おじちゃんはないだろ、おじちゃんは！　俺はまだ三十前だ！」
「いや、三十前って言ったって来月には二十九じゃん！　同じだよ、同じ！」
どうやらスコットさんはもうすぐ二十九歳のようだ。

地球での俺の年齢とほぼ変わらないので、妙な親近感がある。
二十九歳でおじちゃんはないよな！
そんなやり取りを眺めていた門番さんは、会話が一段落したところで街に入るための手続きをするように言ってきた。
みんなはギルドカードを出すだけで良かったが、俺は身分を証明できる物を持ってない。
どうしたらいいかとおろおろしていると、門番さんが「この玉に手を乗せてね」と言ってきたので素直に従った。
すると、触れてすぐに玉が光り出し、またすぐに消えた。
「うん、白く光ったから犯罪歴もないし危険人物ではないな。入って良し！　街の中に入ったら、スコットたちに冒険者ギルドに連れていってもらって登録しておきな！　それが一番手っ取り早い身分証明書になるからな。遅くなったが、ローランの街へようこそ！」
こうして俺たちは門をくぐり、街の中へと入った。
街の中は、まるで世界史の教科書で見た中世ヨーロッパのような街並みだった。
建物はほとんどがレンガ造りで、高いものだと三階建てのものもある。
道はちゃんと舗装されていて歩道と車道に分けられており、車道は馬車が余裕ですれ違えるほどの広さがある。
ここはもしかして、街のメインストリートだろうか？

歩道と車道の境目には街灯が等間隔に設置されていて、それぞれの間には馬車が停められるようなスペースもある。
よく見るとそこはちょうどお店の前なので、馬車で来た買い物客がそこに停められるようになっているのかもしれない。
今はちょうど夕刻なので、チラホラと街灯が灯り始めている。
俺はしばらく物珍しさにキョロキョロしていたが、急いで冒険者ギルドへ向かわなければならないことを思い出した。
「そろそろいいか？　冒険者ギルドへ向かわないと、すぐに暗くなっちまうぞ？」
スコットさんが俺に聞いてきたので頷き返す。
それから俺たちはこの大きな通りの左側の歩道をまっすぐ進み、その道沿いにあるとても大きな扉の建物の前に来た。
そして、スコットさんを先頭にみんながぞろぞろと中に入り、俺も最後に続いた。
中に入ると人はほとんどおらず、閑散としている。
空いている受付の一つにみんなで行くと、スコットさんはそこにいた女性に声をかけた。
「スノーホワイトだ。依頼達成の確認を頼む」
「了解しました。では皆さんのギルドカードを提出してください」
みんながギルドカードを女性に渡すと、彼女はそれをなんらかの魔道具らしき板の上にかざした。

「確かに皆さん、グレートウルフの討伐を達成していますね。依頼達成の手続きをいたします」
「よろしく頼む。あ、それとこいつの冒険者登録もしたいんだが、それも頼めるか？」
「了解しました。書類などを持ってまいります」
女性はまずギルドカードを板の上に置いて操作し、依頼達成の手続きをしたようだ。
その後カウンターの下から書類を取り出し、俺の前に来た。
「こちらに記入をお願いできますか？」
俺がとりあえず書類を見ると、そこには名前や年齢、得意なものなど簡単な内容を書く欄があった。
俺は文字を書けるのだろうか……そんな不安を感じながら日本語で記入してみたが、不思議なことに知らない文字へと勝手に変換されてしまった。
なんだコレ⁉　えっ、文字が変換された⁉　これ、俺の目の錯覚？
驚きながら後ろにいたスコットさんの方を見ると、やっぱり同じく驚いた顔をしていた。
さすがに今聞くわけにもいかず、何事もなかったかのように書類を返した。
「……名前はシエルさんで、年齢は十四歳ですね。特技は特になし……ですか。失礼ですが、戦闘経験はありますか？」
「……あぁ、そこら辺は大丈夫だ。俺たちは依頼で行った森の中でシエルに出会ったんだが、最初はほとんど戦えなかったけど、街に戻る間に鍛えたおかげで、ある程度は戦えるようになったぞ。

特技と言えるものは今のところないが、初期の攻撃魔法と回復魔法、ショートソードは扱える。あ、そういえばこいつは『神獣・魔物使役術』を使えるんだったな！　それが特技と言えば特技か。まだテイムの仕方も分からないようだが、そのうち魔物をテイムしてくるかもしれないから、その時は登録よろしくな」
そう言って、スコットさんが俺の代わりに受け答えをしてくれた。
まだ知り合ったばかりだが、スノーホワイトのメンバーはみんないい人で、特にスコットさんはとても面倒見がいいのがよく分かる。
この世界に来て最初に知り合ったのがこの人たちで良かったとつくづく思う。
「なるほど、そうなんですね。シエルさん、従魔については、増えたらその都度登録しに来てくださいね。登録せずにいると、万が一誰かに従魔を連れ去られたりしても本当に自分の従魔か証明できませんから。登録してあれば必ず誰の従魔か分かりますので、そこだけは忘れないでくださいね。じゃあこれを特技の欄に記入しておきますので、それでギルドカードを作ります。しばらく時間がかかりますが、他に何か用事はありますか？　あ、そういえば依頼にあったグレートウルフの素材とかの買い取りがあるようなら、今のうちに行ってくるといいと思いますよ」
「ああ、そういえばそうだな。じゃあ買い取りの受付に行ってくるから、こいつのギルドカードができたら声をかけてくれ」
「はい、分かりました」

そして、俺たちはまた別の受付に行き、スコットさんがそこの担当者に声をかける。
「すまないが解体と買い取りを頼む。依頼で討伐したものだけじゃなく、行き帰りに討伐した魔物もいっぱいあるんだが、どこに出せばいい？」
すると、受付にいたスキンヘッドで四、五十代の筋肉ムキムキなおじさんが返事をした。
「なんだ、スコットか！　久しぶりだな。そういえばギルマスに聞いたが、例の森にグレートウルフの討伐に行ったんだってな。それらの素材かい？」
「ああ、それだけじゃなくて、行き帰りにも結構な数の魔物が出てな。大型の物ばかりだし、ここじゃ出すのは無理だ」
「そうなのか？　じゃあ先に行ってるから、あそこの扉から裏に回ってくれや」
「分かった、そうさせてもらう」
それから俺たちは、カウンターの横にある扉から外に出て裏に回った。
「おい、こっちだ！」
そこには大きな倉庫があって、さっき受付にいたおじさんが大きな扉を開けて待っていた。
倉庫に入ると、中は体育館並みに広かった。
解体用なのか、とても大きな机がいくつもあり、そのうちのいくつかでは解体作業の真っ最中だった。
置き場所として指定された広い床に、スノーホワイトのメンバーがそれぞれのマジックバッグか

ら討伐した魔物を次々と出した。
次から次へと魔物が積まれていくのを、おじさんは腕を組みながら眺めている。
「こいつぁ～スゲェや！　かなりの数がいたんだな。それにグレートウルフの亜種もいらぁ！　まったく、依頼を受けたのが並みの冒険者じゃなくて良かったとしか言えねぇなぁ」
「あぁ、確かに俺たちが街にいる時で良かったよ。そうじゃなければ低ランクのやつらが被害に遭っただろうな」
「確かにそうだな。……ん？　そ～いやぁ、なんか妙にオークが多くねぇか？」
「あぁ、そうなんだ。行きはそんなでもなかったんだが、帰りは結構な頻度でオークが出てきてな。こいつのも俺たちとは別に買い取りしてもらいたいんだが、全部オークなんだよ」
そう言われたので、俺はみんなとは離れた所に魔物を出した。
「……確かに全部オークだな。もしかしたらグレートウルフに追われて森の浅い所に来ていたのか、それとも巣があるのか……」
「そこら辺は後でギルマスに報告しようと思っていたところだ」
「そうだな、それがいい。もしかすると新たな依頼があるかもしれないしな」
「帰ってきたばかりだから、少しは休みたいけどな」
「とにかく、今回は数が多いから日数もかかりそうだ。だから支払いも二日後くらいになるんじゃないか？　その間はゆっくり休めばいいさ」

「そうだな、シエルに街の中を案内したりしなくちゃだから、ちょうどいい」
スコットさんは笑顔でそう言うと、また受付へと向かった。
受付で先ほどの受付嬢から声をかけられたので、そちらへ向かう。
「シエルさん、ギルドカードの準備ができましたので早速登録しますね！　その後、冒険者ギルドのランクなどの説明をいたします」
俺はギルドカードを受け取ると、まじまじと眺めた。
カードは赤茶色の薄い金属でできている。
色の感じからすると、新品の十円玉みたいだから銅じゃないかな？
そのカードには何も書かれていない。
「そのカードをこの板に置き、空いている場所にどちらの手でも構いませんから置いてください」
俺は言われた通りに、カードを置いてから右手を置いた。
すると、カードが光り出し文字が浮かんできて、俺の名前とランクが表示された。
「はい、もういいですよ。カードをお取りください。これでシエルさんのギルドカードができました。今は名前とランクだけですが、従魔ができたらここに載ります。倒した魔物や攻略したダンジョンなどの情報は自動的にカード内部に記録され、こうやって板にカードをかざすと情報を見ることができます。あ、登録前に討伐した魔物は載りませんので、そこは申し訳ないですが……」
「……なるほど、分かりました。載らないのは別にいいです」

「あとは冒険者ランクの説明ですかね。下はFランクから、通常の最高ランクはAランクです。その上にSランクもありますが、それは三人以上のギルドマスターの推薦と、それ相応の魔物を倒すなどの実績がある者に与えられるランクです。あと、ランクには有効期限があり、低ランクであるほど短く、Fランクは一カ月、Eランクは三カ月、Dランクは一年、Cランクは五年、Bランクは十年、Aランクは三十年、Sランクは無期限です。この有効期限とは、最後に依頼を達成した記録から全く冒険者活動をしていない期間を指します。実質、AランクとSランクは一生涯そのランクと言えますね。あとは……Dランクまでは昇格試験がなく、Cランク以上は試験があります。合格には基準点をクリアする他に、特定の魔物を試験官と一緒に行って討伐する必要があります」
「……分かりました。とりあえず俺は、まずFランクからEランクへと上げないといけないんですね！」
「はい、点数や必要ランクなどに関しては、依頼書に記載がありますので参考にしてください。他に何か質問はありますか？」
受付嬢が説明をし終わって聞いてきたが、特に聞きたいことは思いつかなかった。
すると、後ろにいたスコットさんに「依頼書の見方なんかは後で俺たちが教えるから大丈夫」と言われた。何か分からないことがあったら先輩冒険者であるスノーホワイトのメンバーに聞くことにしよう。
「じゃあこれでシエルの用件は終わりか？　あと、今回の討伐で気になったことがあるから、俺た

ちからギルマスに伝えたいんだが、時間取れそうか？」
「そうですね、今の時間ならまだ部屋にいると思いますので、こちらからどうぞ！　あと、例の森の依頼報酬はギルドマスターから直接もらってください」
受付嬢はそう言って、カウンターの端の部分を持ち上げて階段のある方へ通してくれた。
スコットさんは二階に上がると迷わずに一番奥の部屋へ向かっていき、ドアをノックした。
中から「入っていいですよ～」という若い男性の声がして、スコットさんは「邪魔するぞ～」と声をかけてからドアを開けた。
中には窓際の机に座った男性が一人。多分この人がギルマスなのだろう。
とても若い痩せ型の男性で、長い金髪を片側だけ編み込んで後ろで束ねている。
一見すると、男性なのか女性なのか分からない中性的な顔立ちをしていて、とても綺麗な顔だ。
あと、人よりも長くて尖った耳をしている。エルフの特徴だ。
多分リッキーさんが言っていた「三百年は生きているギルドマスター」とはこの人なのだろう。
彼は何か書き物をしていたが、俺たちがぞろぞろと中に入ると驚いたように顔を上げた。
「なんだ、スコットだけじゃなくてみんな揃って顔を出したんだね。もしかして、例の依頼から帰ったばかりなのかな。それに知らない顔の子もいるみたいだね？」
「あぁ、この子どもは俺たちがグレートウルフと戦っている時に森の中から出てきたんだ。名前はシエルだ。俺たちはさっき街に着いたばかりで、その足でここに来たんだ。解体の依頼をした後に

ちょっと耳に入れておきたい内容があってこっちに……な」
「なんだなんだ、スコットがそんなことを言うなんて、なんか良くないことでもあったの？」
ギルマスはそんなことを言いながら、みんなにソファーに座るよう勧めてきた。
みんながソファーに座ると、ギルマスは俺に向かって「元Aランク冒険者で、今はこの街の冒険者ギルドでマスターをしているルーシェという。よろしくね！」と軽く挨拶してきた。
その後、スコットさんに話の続きをするように目で促す。
「実は今回の依頼の帰り道に、かなりの数のオークが森の浅い所にいてな。森の奥からグレートウルフに追われてきただけなら、脅威がなくなればまた森の奥に戻るから心配ない。だが、それにしては遭遇する数が多すぎたんだ」
「俺たちは別にオークを探しながら歩いていたわけじゃないんでね。それなのにかなりの数がいたってことは、もしかしたら、街の近場に巣ができているんじゃないかっていうことも考えられるって話さ」
スコットさんに続き、リッキーさんも話に加わった。
エミリーさんとリリーさん、俺は一切口を挟まず黙って話の成り行きを見守る。
「なるほどねぇ～……そんなことがあったのか」
それを聞いたルーシェさんは腕を組んで思案し出した。
「とりあえず、帰ってきたばかりなんだから二、三日はゆっくりしなよ。その間に僕の方で今回の

件の今後の方針を決めておくから。改めて依頼を出すかもしれないけど、その時はよろしく頼むね。それはそうと、今回の依頼の報酬を渡さなきゃ。討伐した魔物の料金に関しては解体が終わってからになるけど、通常の依頼報酬は金貨二十四枚だよ」

ルーシェさんはそう言うと、ジャラジャラ音をさせながら小袋をスコットさんに手渡した。

スコットさんは中を軽く確認して自分の鞄にしまった。みんなには後で分けるんだと思う。

「じゃあ今日はこの辺で帰るよ。何かあったらいつもの宿まで連絡よろしくな」

「あぁ、こちらこそよろしくね」

スコットさんとルーシェさんはそう言葉を交わして、俺たちはギルマスの部屋から出た。

「じゃあもう夕飯の時間だし、俺たちが泊まっている宿屋に向かうか。早く行かないと宿自慢の美味しい夕飯が食べられなくなるぞ！」

リッキーさんがギルドの入り口に向かって走り出しながら、振り向いてそう叫んだ。

「待って〜！　あんたが走ると私とリリーが追いつけないのは分かっているでしょ!?」

「そうですよぉ〜！　せめて私たちの速さに合わせてゆっくり走ってくださいな！」

「そうだぞ。俺はついていけるが、三人ともそんなに速くないんだからな？」

みんなは口々にリッキーさんに声をかけつつ、笑いながら走っているリッキーさんに続いて、宿に小走りで向かった。

結局みんなから説得されて、リッキーさんは走るのをやめて早足で歩いてくれた。

おかげで俺も無理しなくて済んで良かったよ。

目的地の宿屋はメインストリート沿いにあったので、実は冒険者ギルドからはそんなに遠くなかったのだが、よほどお腹が空いていたのだろうリッキーさんによって、夕飯には少し早いくらいの時間に着けた。

中に入ると目の前に小さなカウンターがあり、そこには恰幅（かっぷく）のいいおばさんが立っていた。多分女将（おかみ）さんなんじゃないかな？

あと、カウンターの向かって右横奥には部屋が繋がっており、たくさんのテーブルと椅子が見えたので、多分食堂なんじゃないかなと思う。

入り口からすぐの左手側には、人がすれ違えるくらいの幅の階段がある。

宿に入ってすぐに、スコットさんが女将さんに声をかけた。

「女将さん、今日はまだ部屋は空いてるかい？　俺たちの他に一人泊まりたいんだけど」

女将さんは台帳を見ながら頷き、「まだ何部屋か空いてるね」と言った。

「お前さんたちは今まで泊まっていた部屋があるから、それでいいだろ？　あとはそこの見かけない子が一人で泊まるんだね？」

「あぁ、こいつは一人部屋で頼む。とりあえず三泊分前払いで支払うよ」

「了解だ。じゃあ三泊分の料金だが、銀貨三枚だよ」

スコットさんは俺がまだお金を持っていないのを知っているので、払ってくれた。
解体に出している物の買い取り代金が手に入ったら払わなくちゃ！
「シエル、ここの宿代や夕飯なんかの代金は気にするな。俺がしたいからやっているだけで、他のメンバーの負担にはなってないから安心しろよ」
「いえ、そんなわけには……」
「そうよ、気にしなくていいわよ？　どうせさっき解体に出したオークの代金で返そうと思っているんでしょうけど、私たちお金には困ってない高ランク冒険者だから大丈夫よ」
「だな！　それにさっき依頼報酬ももらったばかりだしな」
「うんうん、気にしない、気にしない！」
俺はみんなにそう説得されたので、今回はお言葉に甘えることにした。
まずはそれぞれ部屋に荷物を置いて、それから食堂に集合することになった。
俺の部屋はスコットさんとリッキーさんの二人部屋の隣だった。
俺の荷物は肩掛け鞄一つしかないので、それを置いていけば良かったんだが、なんとなくそのまま持っていた方がいい気がして、部屋の中の確認だけすると食堂に向かった。
食堂に向かう途中でまだカウンターにいた女将さんにお風呂の確認をすると、男女別の共同浴場があることが分かりとても嬉しかった。
やっぱり日本人だもの、できれば毎日お風呂には入りたいものだ。

立ち読みサンプル
はここまで

あとでご飯を食べたら入りに行かねば！
食堂に着くと、スコットさんたちを探したがまだ来ていないようだ。
なので、みんなから分かりやすいように、入り口近くの空いているテーブルに座って待つことにした。
ほどなくしてみんなが一緒に下りてきて、俺のテーブルに座った。
「なんだ、こんなに早く来ていて驚いたが、そのままの状態で来たんだな」
「えぇ、なんとなく寝る時以外は鞄を持っていた方がいいような気がしたもので」
スコットさんの言葉に答えると、エミリーさんが不思議そうな顔をする。
「ふぅ～ん。そんな考えもあるんだね」
「でもその鞄、持ち主しか触れないじゃん？　オークを入れるのも手伝えなかったほどなんだし。なら部屋に置いてきても大丈夫だと思うけど」
そう、リッキーさんの言う通り、この街に着く前に倒したたくさんのオークを鞄に入れる時、リッキーさんが手伝ってくれようとしたのだが、鞄が拒否したのだ。
……もしかしてあのお婆さんが「持ち主を登録して盗難防止の魔法をかけてやるから」と言って俺の血を垂らしたのが原因なのか？
ともかく、この鞄には俺以外は触れないだけじゃなく、中に物を入れる手伝いもできないのがある意味厄介だ。